

江戸城完工

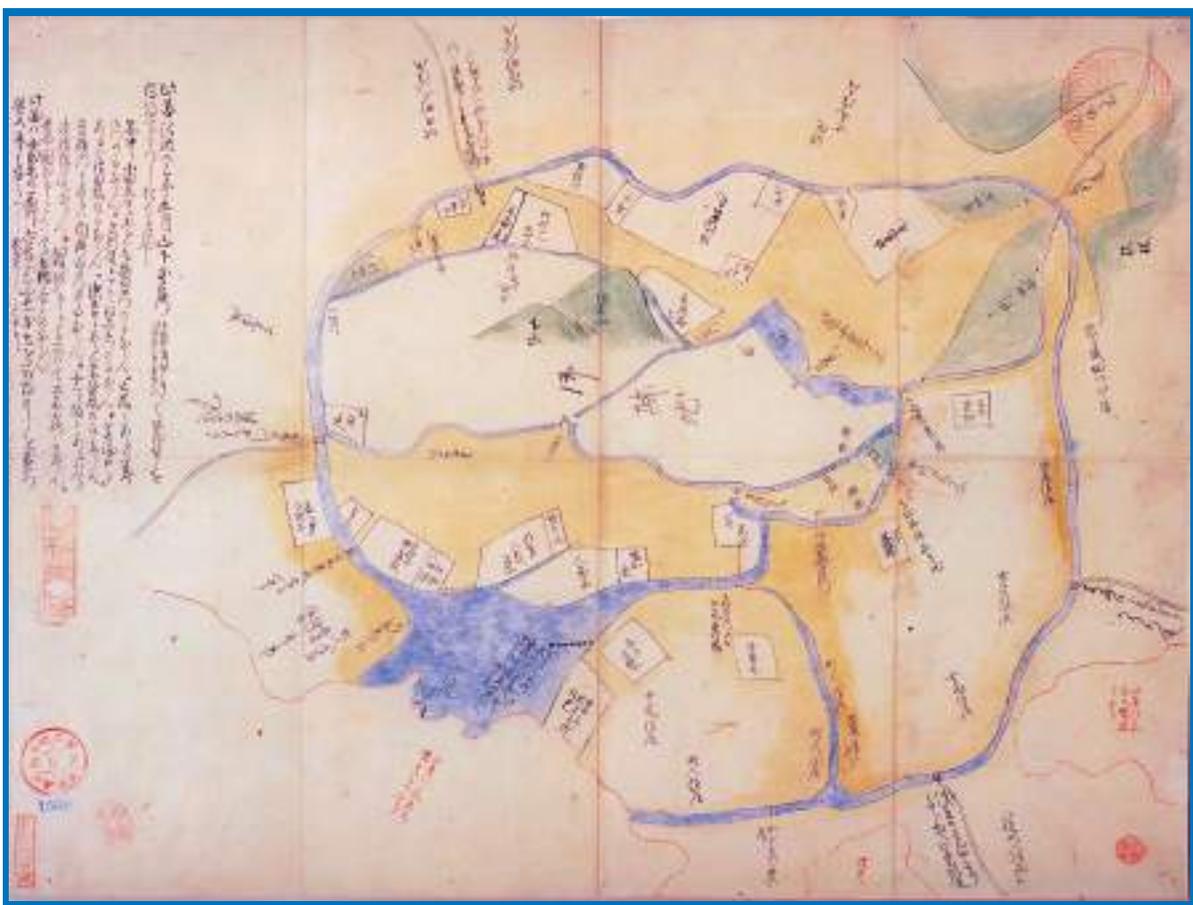
〜甲良家の遺産は語る〜

家光はもう一度本丸を築き直す

江戸城総構えの工事が終わると、三代將軍家光は、最後の仕上げとして、もう一度本丸を築き直した。家康、秀忠の時代から数えて三度目の大工事で、酒井忠勝を総奉行に任命し、寛永十四年(1637)一月から、工事が始められた。

完工した江戸城は、歴史上かつてない大規模のもので、内郭面積だけで一、八平方キロにもなり、通常の城下町では、その全体を占めるほどの大きさであった。内部には、大天守のほか、櫓二十一、多間(城中の長屋)二十八、門が九十九もあって、御殿や蔵が軒を連ね、本丸御殿はまるで迷路のようであった。

本丸御殿は大別して「表」、「中奥」、「奥」の三つに分けられる。「表」は幕府の政治を行なう役所、千畳敷の大広間を中心に、白書院(対面所)、黒書院などの大きな建物が建てられた。内部には名工の誉れが高い甲良豊後らの彫り物、狩野探幽らの絵が、ところ狭しと飾りたてられ、いま日光東照宮で見ることのできる、極彩色の建築ができて上がった。



写図1 最初の江戸図(慶長江戸図)

この図は近世になって最初の江戸の図とされている。測量をしたものではなく、スケッチ風の画であるが、現在皇居となった「御城」を中心として、いまの内濠周辺までを画いている。陸地に海が入り込んでいたが、慶長八年(1603)に埋立てられたので、この図は慶長七年ころのものだと推定される。図の中に「此図弘化二年巳年九月山下友右衛門之所蔵せしを借得てうつしおくもの也・・・」とある。

「中奥」は將軍の住まいで、御座間や御休息所があり、地震のときの避難所として、地震間もつくられた。將軍に仕える小姓の部屋も多く、大台所は、特に大きな建物であった。

「奥」は將軍の夫人や側室(局)たちの住居で、奥と仕切りの石垣で別けられ、女性だけが入り出ることができる仕組みが守られていた。奥方の住む御守殿のほか、仕える女中たちの部屋が長く続き、余りに広く、「大奥」といわれた。

幕府の大棟梁・甲良家の人々

当時の江戸城建設を偲ぶ資料として、甲良家が残した貴重な遺産がある。江戸幕府の大棟梁となった宗広を初代、連綿として代々が大棟梁をつとめ、十一代の棟梁に至る甲良家は、幕府作事方の大棟梁としての図面、文書を集積、その数六百数十点を今に伝えた。昭和六十二年、国指定重要文化財となった。

次頁以降の画図は、甲良家が伝えたものである。

東京都立中央図書館東京誌料文庫所蔵

【誌料名】

- ① 慶長江戸図
- ② 武州豊嶋郡江戸庄図
- ③ 江戸城御本丸御表御中奥御大奥総絵図
- ④ 江戸御城御殿守正面之絵図

増上寺の三門

芝公園四丁目の一角を占める増上寺の三門は、寺の中門にあたり(表門は大門)、正式名称を三解脱門という。元和八年(1622)、江戸幕府大工頭・中井正清を頭とし、甲良宗広らによって建立された。国の重要文化財。三解脱門とは三つの煩惱「(むさぼり)、(いかり)、(おろかさ)」を解脱する門のことで、建築様式は三戸楼門、入母屋造、朱漆塗造り。唐様を中心とした建物に、和様の勾欄などが加味されている。二階内部(非公開)には、釈迦三尊像と十六羅漢像が安置されている。



旧寛永寺五重塔

この塔は寛永八年に建てられたが、同十六年花見客の失火で焼けてしまったため、將軍家では直ちに、甲良宗広とその子宗久に命じて再建した。この塔は上野東照宮の一部として建てられたものであるが、明治になって寛永寺の所属となり、昭和33年東京都に寄付された。現在塔は上野動物園の敷地内にあり、国の重要文化財に指定されている。塔の高さは33m、棟の一層の内部に釈迦如来・薬師如来・弥勒菩薩・阿弥陀如来の四仏が安置されていたが、現在は東京国立博物館に寄託されている。

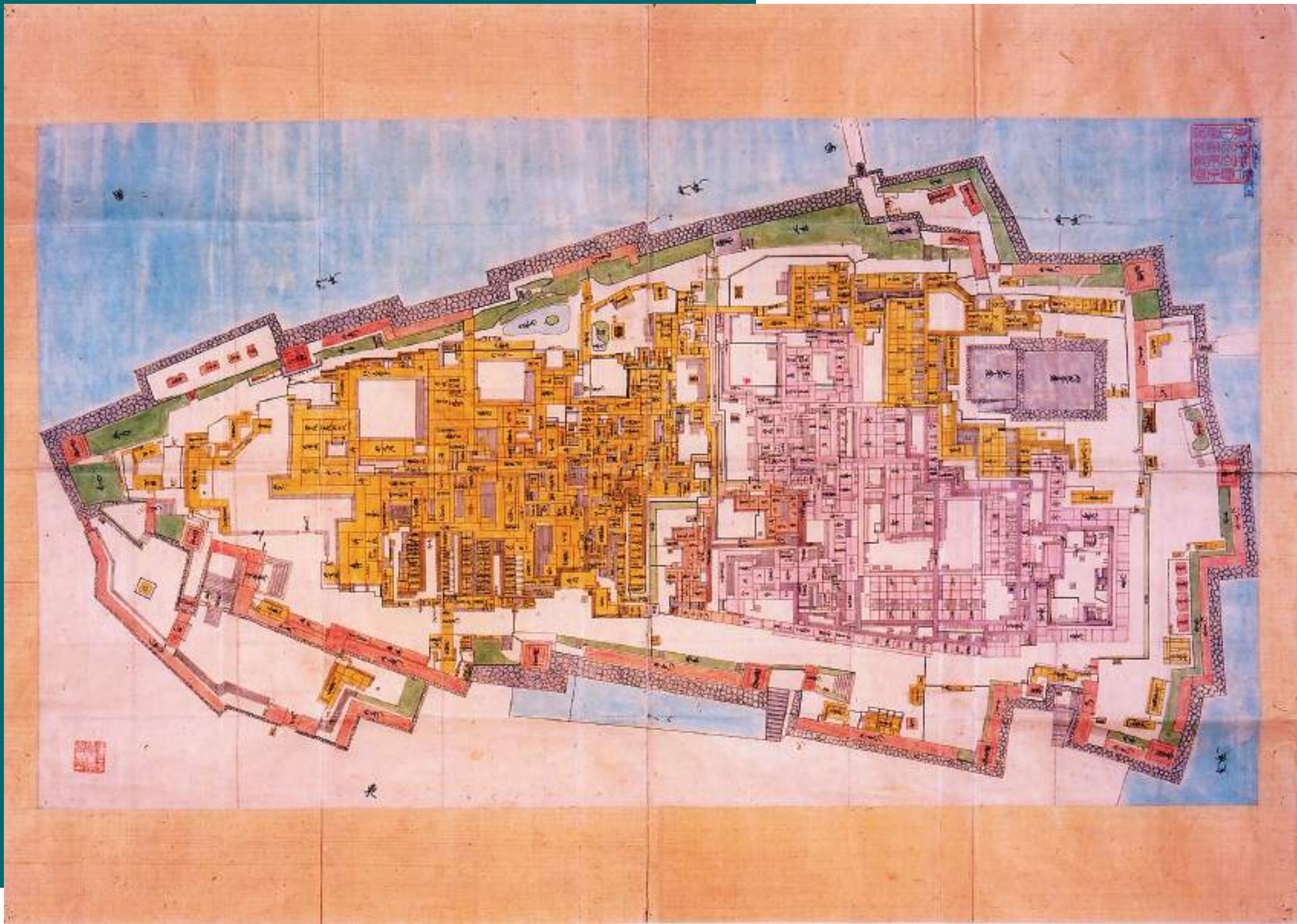


武 列 豊 嶋 郡 江 戸 庄 圖



写図2 初期の江戸図(武州豊嶋郡江戸庄圖)
 初期の江戸図といわれる本図の原本は、豊島の近江守と推定され、凡例に朱をまわして寛永九年(1632)とあるものがある。この年の刊行と推定される。天守殿や、紅葉山、日枝神社、溜池、豊島山下かけの地形、増上寺などが絵画として描かれており、この大部分は地図図として表現されたものではない。本格的な地図図としての表現は、寛永九年(1632)の刊行と推定される。

一 江戸庄の東に、江戸川が流れて、江戸川に架かる橋は、江戸橋といふ。
 一 江戸庄の西に、豊島川が流れて、豊島川に架かる橋は、豊島橋といふ。
 一 江戸庄の南に、豊島川が流れて、豊島川に架かる橋は、豊島橋といふ。
 一 江戸庄の北に、豊島川が流れて、豊島川に架かる橋は、豊島橋といふ。
 一 江戸庄の東に、江戸川が流れて、江戸川に架かる橋は、江戸橋といふ。
 一 江戸庄の西に、豊島川が流れて、豊島川に架かる橋は、豊島橋といふ。
 一 江戸庄の南に、豊島川が流れて、豊島川に架かる橋は、豊島橋といふ。
 一 江戸庄の北に、豊島川が流れて、豊島川に架かる橋は、豊島橋といふ。
 寛永九年(1632) 重刊板



写図3 江戸城本丸全図(江戸城御本丸御表御中奥御大奥総絵図)
この図は万治二年(1659)に再建された本丸全体を描いた平面図と考えられている。
幕府の政庁であり、また將軍の住居でもあった江戸城本丸御殿は、江戸時代に何度かの火災で消失、再建を繰り返した。
本図は明暦三年の大火で消失したあと再建されたものとされている。このとき消失した天守は、その台だけが記されて
いる。本丸御殿は表、中奥、大奥の三つの区域が、この順に南から北に配置されたが、表と中奥との間には明確
な境界がないが、大奥との境は厳重に区切られ、御鈴廊下のみでつながっていた。

年表 〈江戸から東京へ〉

年号	西暦	将軍	出来事
長禄	1457		一説によれば太田道灌、3月1日に江戸城を築城、また4月18日に築城との説あり。
文明	1476		長尾景春の乱が勃発し、太田道灌が江戸城を中心に活躍する。太田道灌が相模国糟谷にて上杉定正に謀殺される。
天正	1590		徳川家康が江戸城に入る。江戸城普請を開始。このころ、小名木川を掘る。
慶長	1598		秀吉死去。
	1600		関ヶ原の戦い。
	1603	家康	徳川家康、征夷大将軍となる。江戸幕府開府。
	1604		江戸城普請計画の発表。
	1605	秀忠	徳川秀忠、征夷大将軍となる。
	1606		江戸城本丸を中心に工事が開始される。
	1607		天守ほか本丸が完成。
	1612		幕府、直轄領でのキリスト教を禁止。大阪冬の陣。
元和	1615		大阪夏の陣。豊臣家滅亡。
	1616		武家諸法度を制定。
	1617		徳川家康死去。
	1620		吉原の遊郭できる。
	1622		神田山の切り直し完成。
	1623		本丸大改造が開始される。
寛永	1624	家光	徳川家光が征夷大将軍となる。この年、元和期の天守完成か。
	1635		寛永寺を創建する。
	1637		参勤交代を制度化。
	1638		江戸城総構え工事最終段階に入る。
	1639		島原の乱。
	1639		江戸城本丸再建工事開始。
	1639		寛永期の天守完成。
	1639		ポルトガル人の来航を禁止する。
	1639		本丸御殿焼失。

年号	西暦	将軍	出来事
慶安	1650		江戸大地震。
承応	1651	家綱	家光死去。
明暦	1657		玉川上水の工事が完了する。
万治	1659		明暦の大火。(振袖火事)
貞享	1687	綱吉	江戸城本丸御殿の再興なる。
元禄	1690		両国橋を架ける。
	1698		生類憐令発布。(以下同種のもが次々に出される)
	1700		湯島聖堂ができる。
宝永	1703	家宣	永代橋を架ける。内藤新宿を開く。
	1709		赤穂浪士討入り。
正徳	1713	家継	大地震(元禄地震)により石垣、櫓、門など破損。
	1716		綱吉死去。
享保	1717	吉宗	生類憐令廃止。
	1720		吉宗、将軍となる。
	1721		大岡忠相、江戸町奉行となる。
	1721		町火消し「いろは四十八組」をおく。
	1721		目安箱の制をはじめ。
	1745	家重	小石川薬園ができる。
宝暦	1751		吉宗死去。
天明	1786	家治	天保の飢饉。
天保	1832	家斉	
嘉永	1853	家慶	ペリー(黒船)来航。
	1854	家定	日米和親条約を結ぶ。
安政	1855		安政の大地震。城内各所に被害。
	1858		日米通商条約調印。
	1866	慶喜	安政の大獄。コレラ・天然痘の流行。
慶応	1867		大打ちこわし。
	1868		大政奉還。
明治	1868		慶喜、江戸城を出て上野東叡山寛永寺へ蟄居。
	1868		新政府軍、江戸城入城。
	1868		明治天皇入城。「江戸」を「東京」とする。



写図4 天守閣(江戸御城御殿守正面之絵図)

この図は正徳二年(1712)に作成された再建計画の立面図で、寛永度の図面をもとにして、最上階の屋根に鯨幹を置き、唐破風、千鳥破風を配し、腰壁は銅版張りになっている。実際には再建されることはなかった。

幕府大棟梁・甲良家の人々

江戸開府四百年余り、江戸幕府の建設事業に深く関わったのは作事方奉行で、この時代の建築の多くは作事方の作品で、すでに古典的となった建築の伝統は作事方によって守られてきた。

作事奉行の下に大工頭がいたが、この職は技術官僚の最高位の職名で世襲制であった。その下の大棟梁は、建築工事を直接指揮する最高の技術者として、甲良、鶴、平内の三家が世襲し、のちには辻内、石丸家加わった。大棟梁も世襲制で、それぞれが設計指針書として木割術を代々にわたって伝えた。大棟梁はデザインを担当し、また工事の監督をも務める職務をもっていた。

中世の習わしで、社寺や貴族が保護する「座」（同業組合）の管理下にあったが、戦国時代の大名の改革により、自由競争を避けて工人を保護する「座」という独占、閉鎖的な仕組みが破られた。大名は「座」にとらわれず才能のある人材を集め始めた。近江の堂宮大工であった甲良家が世に出たのは、まさにこの頃であった。

で、このとき甲良宗広は作事方大棟梁として「寛永大造替」に参加、設計はもとより、自ら彫刻を彫り、現場の指揮をとった。工期はわづかに一年七ヶ月だったといわれ、その完成を喜んだ家光は、宗広に対して破格の官位として「四位」、太刀と馬とを下賜した。

滋賀県犬上郡甲良町に在る「甲良豊後守宗広記念館」には、甲良宗広の偉業を讃え、幕府作事方大棟梁職として、甲良家に遺された資料を展示している。

甲良家歴代と甲良家文書

初代宗広につづき、二代宗次、三代宗賀、四代宗員、五代棟利、六代棟保、七代棟政、八代棟村、九代棟彌、十代棟全、十一代棟隆まで、江戸幕府作事方大棟梁の職を代々勤め、日光東照宮、江戸城西丸御殿、本丸御殿の修理などに当たった。

棟全の子で、十二代を継いだ盈株が保管していた甲良家文書は、甲良家最後の当主甲良伝次郎（棟隆の子）から、昭和三年、当時の日比谷図書館に納められたものである。その内646点が、昭和六十二年国の重要文化財に指定された。

甲良家初代の甲良宗広（1574～1646）は、このような時代に、いまの滋賀県犬上郡甲良町法養寺に生まれた。彦根市や八日市市に近く、東海道新幹線が近くを走る。この地は甲良大工のまちで、国宝を含めていくつもの文化財が残る。築城の天才といわれた藤堂高虎も甲良の出身である。

宗広は二十三歳となった慶長元年（1596）、伏見で徳川家康邸の造営に当たったが、同五年江戸に下り、同十年には増上寺山門の棟梁をつとめた。やがて宗広は日光東照宮の「寛永の大棟梁」といわれる最高の地位を得た。

徳川家康をまつる東照宮が二代將軍秀忠によって日光に創建されたのは、元和三年（1617）のことであるが、当時のものは、国宝に指定され、世界遺産にも登録されている日光社寺群とは比較できないような素朴な建造物だった。因みに徳川家発祥の地である群馬県新田郡尾島町の東照宮は、元和の社殿を移築したものと伝えられている。

いま全国には七十もの東照宮があり、その大部分は江戸時代のものだが、明治時代に旧幕臣が建てたというものもある。

絢爛豪華な装飾で知られるいまの日光東照宮は、祖父の家康を尊敬する二代將軍家光によって建替えられたもの

日比谷図書館は昭和二十年五月、戦災によって建物、蔵書が全焼したので、これらの書類が納められた経緯は不明であるが、幸い、第二次大戦末期、日比谷図書館は戦渦から図書を守るため、蔵書家から図書を買上げ、自ら所蔵していた貴重な資料を多摩地域に疎開させていた。戦時下にも耐えた甲良家文書を目の当たりにするとき、感慨深いものがある。

旧日比谷図書館の蔵書を引継いで東京都立中央図書館が開館し、甲良家文書は特別文庫室内東京誌料に収められた。

建仁寺流の伝承と大島盈株

甲良家では宗広の祖父に当たる光広が京都に出て建仁寺門前の大工の弟子となり、「建仁寺流」を称した。

江戸城の資料として欠かせない重要文化財「甲良家文書」は十二代大島盈株が保管していたものであるが、彼は甲良家七代棟政（大島家を継ぐ）の孫で、幼時より甲良家十代棟全から建築を学んでいた。甲良家が明治維新にさいして家職を廃するや、甲良建仁寺流第十二代を継ぎ、幕末から明治初年にかけて日本建築界に重きをなした。新橋駅の建設も手掛けたと言われている。